

最終講義



43 年間の軌跡と将来への展望
—— 東京医科大学と ESS の皆様へ
感謝を込めて ——

43 Years of Medical English Education,
International Relation, and the Prospects
for the Future :

My Grateful Thanks to Tokyo Medical University

J. P. バロン

J. P. Barron

東京医科大学国際医学情報学講座

The Department of International Medical Communications

1. はじめに

私は初めて東京医科大学外科学第一講座の主任教授の早田義博先生に出会って以来、43年もの間、東京医科大学の研究と教育の発展に携わってまいりました。まず始めに、この場をお借りして、早田義博先生をはじめ、外科医局、白井正彦学長、ESSの皆様、講座のスタッフ、関係者各位のご支援とご協力を得て、東京医科大学での職務を遂行できたことを、深く感謝申し上げます。

1963年、15歳のときに両親との葛藤などから、パスポートを持って家を出てから私が此処に至るまでには、様々な変遷がありました。家を出たときの所持金は1,000円に満たないものでしたが、その翌日、無事にアメリカに到着することができました。当時、私の二人の姉はマサチューセッツ州のケンブリッジ市内の大学で研究を行っていて、私が高校入学、そして卒業するまで、面倒をみてくれました。高校卒業後は、大学からお金を借りたり、奨学金を

もらったりしながら、アルバイトの仕事を幾つもこなして、1人で自活し、ペンシルバニア大学を卒業することができました。その後、1969年に、国際基督教大学（ICU）の特別研究生として、東洋研究分野の学位を取得するために来日致しました。ちょうどその頃の日本は、日米安保闘争など学生運動全盛期で、ほとんどの大学が閉鎖されていたため、私は主にアルバイトで英語を教えることにより生計を立て、学費を稼ぐことができました。

1970年3月に、東京医科大学の早田義博教授からご連絡頂き、先生に英語を教えることになり、まもなく、外科学第一講座の他の先生方も加わることになりました。それから10年間、早田先生は、国外では知られていない、多くの有名な日本人医師や外科医、特に胸部外科、内科、皮膚科、眼科、病理などの先生方を私に紹介してくださいました。その貴重な10年の中で、私はいかに日本の医学が優れているか、その一方で、日本人の医師・研究者がいかに言語面において不利な立場にあるのかを、何度

* 本論文は平成25年1月18日に行われた最終講義の要旨である。
(別冊請求先: 〒151-0064 東京都渋谷区上原3-27-13 J.P. バロン)



Fig. 1 二十代の頃



Fig. 2 私の恩師の故早田義博先生

も痛感することとなります。例えば、早田先生は、東京オリンピックの直後に、世界で3例目となる肺葉移植を行った優秀な手術を行う外科医でしたが、その情報を発信できなかったために、西洋の誰もその事実を知りませんでした。同様に、世界レベルの仕事をしている医師、外科医は国内に多数おりましたが、英語が障壁となり、出版にこぎつけることができず、残念ながら世界的にその活躍が知られることはありませんでした。

そんな中、早田先生は、1972年に、東京医科大学の外科学第一講座の症例検討会を、全て英語で行うことを発案され、私がお手伝いすることとなりました。これは、日本初の試みで、今日まで続いている取り組みです。同時に、早田先生のチームには、手術だけでなく、気管支鏡、細胞学、肺がんの発癌実験といった分野で、世界をリードする一流の医師・研究者が集まっており、私は様々なことを学ぶことができました。毎週金曜日に、4人から6人の医師達が、私1人を相手に深夜近くまで医学や

医学論文について教えて下さったおかげで、私は医学論文をどのように翻訳・校閲すればよいのかを学ぶことができました。

2. 本学の国際化について

1974年の終わりになっても、英語の障壁は未だ厚く、医学分野で世界レベルの仕事をしていながらもかかわらず、日本と東京医科大学は世界からまだほとんど孤立している状態でした。私はこの現状をみて、医学分野で先駆的な仕事をしている日本国内の医師達が世界で認められるべきだと強く感じ、そのためにはまず国際雑誌への論文の掲載を目指すよりも、国際学会に参加し、口頭発表を行ったり、人脈を広げることから始めるべきだと考えました。それ以降、早田先生をはじめ、本学や国立がんセンターなどで指導的立場にいる多くの医師達は、様々な領域で新たに国際学会を設立したり、国際学会に参加したりして、各分野におけるリーダーになっていきました。特に早田先生は、日本外科学会、日本胸部外科学会、世界肺癌会議などの会長を歴任されました。

1975年、早田先生と先生の支援者のご協力により、ネパールの標高4,200メートルのエベレスト近くに東京医科大学高山医学研究所を設置し、ネパール王家の健康診断のみならず、日本人の治療を行い、若手医師や看護スタッフが海外の施設を長期訪問する機会が増えていきました。これを機に、「東京医科大学の国際化」が始まるのですが、この時期は今振り返ってみると、さながら、日本の医師達が長崎の出島でオランダ人から西洋医学の教えを受けた「蘭学医の時代」であったのように思われます。

1970年代後半から1980年代にかけて、東京医科大学が特に高い評価を受けていたのは、内視鏡を駆使したレーザー治療、眼科、肺癌、腸内視鏡、脳神経外科などの分野でした。こういった優れた実績や研究を各分野のジャーナルに論文などの形で発信することを目指して、1991年に、アジアで初めての国際医学情報センターが本学に設立され、私はその初代教授を拜命致しました。センター設立後は、東京医科大学における論文の掲載数が増えていっただけでなく、海外への長期留学希望者や休暇中の短期留学希望者も増加していったように思います。しかしながら、当時はまだ、大学として海外の機関と公式な連携や姉妹協定が結ばれていなかったため、留

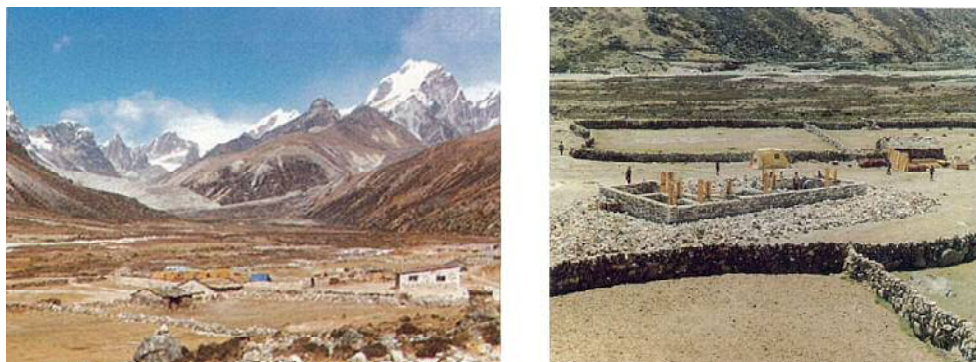


Fig. 3 ネパールの東京医科大学高山医学研究所



Fig. 4 ネパール国王から勲章を授与される早田先生（右端は著者）。

学希望者がいた場合、私の友人がいる米国のメ
 ヨーククリニックやカナダのトロント大学、ヨーロッ
 パ各国の大学に紹介しておりました。当時は、運良
 く海外で研修を受けることができても、学生は単位
 をもらうことができませんでした。

そのちょうど 10 年後の 2011 年に、世界で活躍で
 ける医師を育成する方針を鮮明に打ち出した臼井学
 長の力強いリーダーシップの下、国際交流委員会が
 発足しました。私は初代委員長として、長期・短期
 にかかわらず、本学の学生及び教職員が国外に留学
 (研修)をする場合、また、国外から学生や教職員
 を受け入れる場合に積極的に支援を行って参りまし
 た。その結果、本学の国際交流プログラムは、ここ
 数年でかなり充実してきており、現在、海外の大学
 や病院など関連施設との学生交流の締結は、ヨー
 ロッパ、アジア、北米に合わせて 7 施設となり、現
 在交渉中の大学、施設も 8 ヶ所にのぼります。

図 6 から分かるように、姉妹校ならびに交換留
 学の提携校はここ数年急速に増えており、本学の学
 生が在学中に海外の医科大学で学ぶことのできる環
 境が更に整備されつつあることは、大変喜ばしいこ
 とと思っております。今後、広い視野と語学力を備
 えて、国際的に活躍できる医師が本学から数多く巣



Fig. 5 濟州大学校（大韓民国）と東京医科大学との姉妹校提携調印式（平成 23 年 7 月 21 日）



Fig. 6 海外の大学、施設との交流状況

立つことを期待しています。(詳しくはこちらの URL をご覧ください。 <http://www.tokyo-med.ac.jp/suishin/kokusai/japanese.html>)

3. 医学英語教育プログラム

1991年に国際医学情報センターの教授に就任した私は、当時の先生方から直々に頼まれて、東京医科大学の医学英語プログラムをスタートさせました。最初は医学部3年生を対象に少人数だったものが、2003年には1年生、そして2005年には3,4年生の全学年を対象にした医学英語教育プログラムに発展致しました。

さらに、本学の国際化の進展とほぼ同時期の2005年に、血液内科の大屋敷一馬主任教授のご尽力を賜り、本学の医学英語教育刷新を目的とした、多額の助成金を文部科学省から受けることになりました。それにより、多くの臨床の先生方の多大なるご協力も得て、臨床と語学を密接に関連させた画期的な臓器別医学英語教育プログラムを構築することができ、現在も3年生(後期)と4年生(通年)を対象に実施しております。

医学英語の授業では、臨床の臓器別授業に合わせた独自の臓器別医学英語カリキュラムを組み、当病院臨床専門医を授業に招き、双方向性視聴覚システムを使って、臨床に関する学生からの質問にリアルタイムで返答しております。授業で使用している教材は、リーディングやリスニング、単語面の強化を

図るために、以下の四つの内容に分けることができます: Terminology (臨床医が選択した各臓器モジュールで使用される最重要単語集)、Clinical Concepts (本学の臨床医に執筆頂いた原稿を当講座で教材化したもの)、Selected Readings (New England Journal of Medicine の許可を得て、原著論文の Introduction を教材化したもの)、Doctor-Patient Consultation (イギリスでの実際の医療面接を教材化したもの)。

特に医療面接は、イギリスのレスター大学とともに、医師・患者全員の了解を得て、イギリスでの実際の医療面接を録画し教材化したものを共同で開発しました。これらの教材は、2008年2月より、全てインターネット上に公開されております (www.emp-tmu.net)。世界中どこからでも、医学英語に興味のある人は誰でも利用登録をして無料で学習することができる、大変画期的なオンライン教材サイトで、世界中に登録者がおります。

本学での医学英語教育プログラムにおける実績が評価されたこともあり、欧州連合(EU)各国の教育・研究機関が中心となって進めている Standardised Language Examinations For Medical Purposes (sTANDEM) プロジェクトに第三国参加者として、本学も参加することになりました。これは、欧州連合の医学英語教育・評価の標準化を目指すプロジェクトで、EUの研究助成金を受けての協力となります。ポーランドのヤギェウォ大学(The Jagiellonian Univer-



Fig. 7 医学英語 4 の授業風景

sity) を中心として進められ、オーストリアのインスブルック医科大学 (Innsbruck Medical University)、ハンガリーのペーチ大学 (University of Pécs) 等、欧州各国の大学や教育機関が参加しています。このプロジェクトへの参加は、医学英語教育の国際標準化にも貢献する画期的な試みだといえます。

4. 院内英語論文校閲システム

当講座には、本学のスタッフのみを対象に提供している独自の英語論文校閲システムがあります。1991 年に国際医学情報センターが設立されて以来、

そして 2009 年に国際医学情報学講座に昇格して以来、その大きな使命の一つに、学内・院内の医師によるトップ医学ジャーナルへの論文掲載を支援する校閲サービスが挙げられます。2010 年より、当講座に医学分野における研究論文の校閲経験が豊かなシニアエディターのバロガ准教授を迎え、従来の紙媒体の校閲サービスから、同年に電子校閲サービスへ全面的に移行致し、先生方からもご好評を頂いております。

当講座の校閲サービスの特徴は、以下の通りです。
① 著者・校閲者間のマンツーマン個別面談 ② ピ

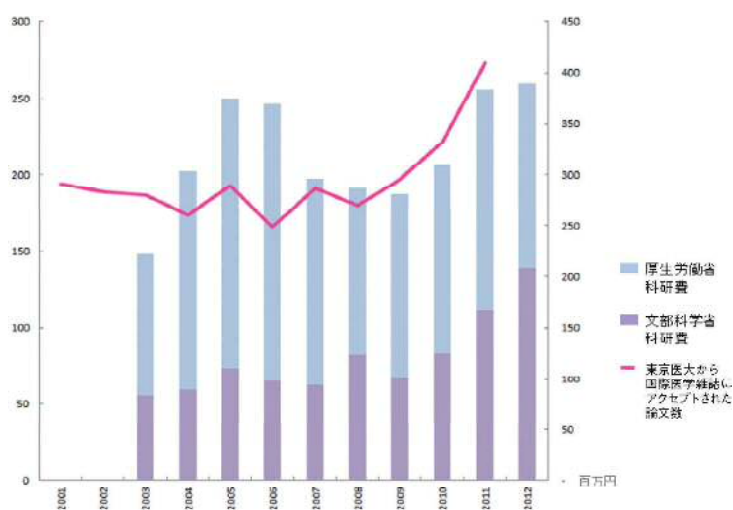


Fig. 8 論文掲載数と科研費の増加

アレビュー後も論文のアクセプトまで完全なサポート ③ そのまま投稿できるクリーンコピーと変更履歴がわかる PDF ファイルの返却、の3点です。再投稿支援も含めて、医学論文校閲専門チームによるきめ細やかなサポートにより、国際的なジャーナルへの論文掲載数も順調に伸びてきております。現在は、校閲インターンも数名抱え、今後さらに校閲部門の拡大が見込まれます。将来的には、校閲者インターンシッププログラムの導入も検討されております。

前ページのグラフ (Fig. 8) は、2003年から2011年までの、東京医大の論文掲載数と、日本政府から本学が獲得した研究費を示したものです。掲載数の伸びと研究費の伸びが比例していることが、わかりいただけると思います。

このように、当講座は今後も院内校閲サービスの充実を図り、本学の論文の採用率を向上させることで、大学の知名度を高めるだけでなく、公的研究費獲得や外部資金獲得の増加を支援していく役割を担っていくことが期待されます。

5. 英語論文投稿支援サイト

院内の校閲システム確立の他に、私は2006年に日本人医師を対象とした英語論文投稿支援サイト www.ronbun.jp の立ち上げに携わり、現在も定期的に新しいコンテンツを提供し続けております。このサイトは、普段多忙な医師達が、国際ジャーナルなどに論文投稿をする際に役立つ、統一規定 (Uniform Requirements) や、COPE (出版倫理委員会) のフローチャート、カバーレターのサンプル集等、様々な情報を集めたサイトです。2013年3月には、論文執筆や再投稿、口頭発表、ポスター発表、COIをはじめとする倫理的問題など、計7章から成る日英2ヶ国語による約18時間にわたる動画講義集を、スマートフォンやパソコンなどで無料でダウンロードしてご利用頂けるコンテンツを加えて、更にバージョンアップいたしました。

6. 将来への展望

ここからは、教育、校閲、研究、国際交流、そして国際医療ツーリズムといった分野での本学や本講



Fig. 9 論文投稿支援サイト

座の新たな方向性や展望について述べさせて頂きたいと思ひます。まず教育につきましては、新たな学位取得プログラムの提案をさせて頂きたいと思ひます。具体的には、大学院博士課程プログラムの改訂への協力と医学コミュニケーションの様々な分野における修士号や博士号の学位が取得できるプログラムの創設です。このプログラムは恐らく世界初の画期的なプログラムになると考えており、本講座で近い将来の実現を目指して現在計画中です。

次に英語論文校閲部門ですが、今後更なる国際化に向けて、様々な準備が行われております。最初のステップとして、2013年には、European Association of Science Editors 編集委員長から、インターンシッププログラムへの協力依頼があり、本講座のバロガ准教授の下で、ヨーロッパや中央アジアから年に2人ずつ、博士課程候補生が本講座の電子校閲システムを学び、トレーニングを受ける予定となっております。これは恐らく日本初の取り組みであり、今後校閲部門においても、ヨーロッパやアメリカとの知識の共有や連携など、ますます国際化が進むことが期待されます。

本学の研究においては、主要な海外の医療センターとの連携や、講座単位での共同研究を可能にする共同研究センターの設立ができればと願っております。従来のように、海外の研究者と本学の研究者が個別に共同研究をするのではなく、講座単位で研

究者達が行き来して、共同研究ができるスペースを病院内に設置することができれば、大変画期的な研究に繋がると考えております。既に、少なくとも一つ、ヨーロッパで一番古い医学校で、このような共同研究センターを設立しようという構想が持ち上がっています。

国際交流においては、単位取得可能な海外臨床実地研修、そして本学における海外からの医学生、看護師、研究員の受け入れ体制の整備強化が挙げられます。今後、本学の学生が、12単位分の臨床実地研修を海外で受けることができるようになれば、そしてそれに対応して、本学でも海外の学生をしっかりと受け入れていくことができるようになれば、本学の国際化は飛躍的に進み、ひいては、患者さんへの治療の質の向上が見込めるようになると思ひます。

最後に、政府の国際医療ツーリズム計画について述べたいと思ひます。日本政府は、日本が国際医療ツーリズムの目的地になることを望んでいると述べています。日本の医療は、世界でも特に優れており、本学の高い医療技術を駆使すれば、医療の分野でも国際的に大きな貢献ができるものと思ひます。私がここまでやってこられたのは、心臓外科の前教授である渡邊剛先生と、本病院の看護師たちの手厚い看護のおかげです。海外研修などを通して、看護師たちが国際的に技能を磨いていけば、その看護技術は他に類をみないものになると思ひます。



Fig. 10 医学英語コミュニケーション分野での30年の歩み。(1980年にSt. Marianna医大の助教授になって以来)

おわりに

私が医学英語コミュニケーションという分野で歩んできた30年の歴史を以下の図に示しました。

このように、国際医学情報学講座は、今後も、東京医科大学とともに、国内のみならず、海外に向けても、ますます発展していくものと確信しております。私の人生は、東京医科大学との出会いがなければ、確実に、今とは全く違うものになっていました。

私の座右の銘は、「棺を覆いて事定まる」です。これは、生きているうちは、利害や感情などが絡んで、人に対して公正な判断ができないため、人間の評価は死後に定まる、という意味です。

最後になりましたが、ここで改めて、偉大な恩師、早田義博教授と東京医科大学、東京医科大学病院の皆様へ深く御礼を申し上げますとともに、益々のご発展をお祈りしております。長い間、どうもありがとうございました。